慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	幕末江戸の、ひとり観光旅行：『江戸名所独案内』にみる、近世末期の江戸市中旅ガイド
Sub Title	Private tour in Edo : "Edo meisho hitori annai", a tourist guidebook in the middle 19th Century
Author	内藤, 正人(Naito, Masato)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2010
Jtitle	Booklet Vol.18, (2010.) ,p.52- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Cultural Tourism 3 : 一部図版削除
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000018-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

幕末江戸の、ひとり観光旅行

――『江戸名所独案内』にみる、近世末期の江戸市中旅ガイド

内藤　正人

江戸時代の後期には、木版印刷による名所図会が大流行した。六十余州の一部の国々や街道などをテーマとする名所図会は、一般には地誌書に分類され、地勢・風土の解説文とともに、豊富な挿図を含んでいる。諸国名所のみならず、他方で特定の街道や山岳などもとりあげられているが、当然のことながら都や江戸など大都市の名所図会も鋭意制作された。それらの最たるものに、著名な『東海道名所図会』や『江戸名所図会』が例示できることはいうまでもない。

上記の名所図会類は、確かに地誌を取り上げる性格が多分に強いものの、実際の旅程や著名なランドマークを紹介するという点で、同様に江戸後期に多数出版された、いわゆる名所記、案内記とその役割を一部重複させる。とくにそれら名所記類では、風土の紹介や説明には重点が置かれず、むしろポイントとなる名所をスポット的に取り上げる書き方が普遍的である。たとえば街道名所記では、道筋に沿って宿場と周辺を個別に紹介し、あるいは都市の名所記では方角等に区分しながら個々のルートに沿って次々にランドマークを紹介していく記述法をこそ、我々は多く目にすることになるのである。

さて、日本一の人口密集地であった武都江戸では、もっとも数多くの名所図会類や案内記類が刊行されている。その出版量は江戸期ではさすがに随一であり、なかでも象徴的な事例が、江戸の町名主斎藤月岑編の『江戸名所図会』（天保5・1834～天保7・1836）であろう。本書は長谷川雪旦による豊富な挿図と、七巻二十冊にのぼる膨大な情報量とが圧巻で、今日でも江戸の考証研究では依拠すべき重要文献となっている。江戸名所関連では、早く『江戸名所記』『江戸砂子』『江府名勝志』など類書の蓄積があり、また浮世絵師が手掛けた絵本も、枚挙にいとまがないという譬えが相応しいほど膨大な数量が出版されるなど、幾重にも重なる分厚い地層を形成している。他方一枚摺の浮世絵版画でも、名所絵のジャンルが幕末の天保期、1830年代から本格化し、カラフルな色摺版画に江戸の風景表現が

多様に展開する。名所絵版画では葛飾北斎らも参画したが、なんといってもその牽引役は歌川広重であり、『江戸名所』等のシリーズ名を冠した数多くの江戸名所図の揃い物を描いた。最晩年にはその集大成として、有名な『名所江戸百景』が上梓されているのである。

こうした名所関連の図会や錦絵刊行状況のなかで、江戸名所として抽出される八百八町の個々の地名は、江戸自慢の江戸っ子たち自身の手によってそれらのみ単独で取り出され、一般に往来物と呼称される手習いの教本にも作られた。往来物とは、古代末期からの往復の書簡類をそのまま手習いや教養の教本としたものだが、近世には手紙以外の内容も多く盛り込まれ、歴史や地理などを教本の内容にとりあげるものも少なくなかった。この種の書物は刊本として、庭訓往来や女今川といった本家本元の往来物同様、もっぱら漢字の学習、練習用、また教養向けに編纂され普及しており、たとえば江戸往来と呼称される刊本では、名所を含む江戸八百八町の町名や寺社名などが文字どおり羅列され、読み書きの手本に使用されている。その全般的なようすからは、京の都への対抗心を露わにしながら発展拡大を続けていった江戸っ子たちによる、身贔屓の自信ありげな姿さえも見え隠れするのである。

ところで、今回本稿に取り上げるのは、上記のいずれの書物ともやや方向性の異なる企画本で、都市江戸で刊行された多数の類書のなかでも異彩を放ち、ひときわ興味深い史料である。先に内容を簡便に要約するならば、本書は地方からのお上りさん向けに書かれた、懇切丁寧な江戸歩き本、という説明が適切であろう。一般に江戸名所関連の類書では、個別のランドマークの詳細な説明にこそ力点が置かれるものだが、本書はむしろそこにではなく、その代わりとしてたとえば各ランドマークから次の名所まで、具体的な距離と方向を示しながらどのように歩んで行くのかを、手とり足とりガイドすることに関心が注がれる。まさに、江戸知らずの地方人向けの、江戸市街地徒歩散策ガイドとしての実用的、具体的な記述が目をひくのである。小稿では興味深いこの史料をもとにしながら、幕末江戸のプラクティカルな観光小旅行プランを、往時のコンテクストから読み解くことによって、幕末期には拡大を遂げた都市江戸の、認定名所の地理的範疇や、江戸人たちに共有された新興の武都江戸の自負心などを探りたいと考える。

『江戸名所独案内』の内容を吟味する
――「南の方」、南方へのガイドを例として

『江戸名所独案内』は、弘化３年（1846）春の序をもつ墨摺の中本一冊で、時期としては最幕末、しかも江戸市中が壊滅的な打撃を受ける安政二年（1855）の大地震が起きる前の出版物である。まず、本書の著者松亭金水（寛政９・1797～文久２・1863）は江戸後期の人気戯作者で、最初筆耕として人情本の文字浄書などを手掛けたのち、自ら戯作者に転向した著名人。

図1

天保期以降は為永春水の後継者として勧善懲悪ものの小説を多作し、末期人情本界の代表的作家となった人物で、人情本以外にも合巻や読本、随筆類も執筆するなど多様な活動を残している。つぎに、挿図を担当した歌川国直（寛政7・1795〜安政元・1854）は人気浮世絵師歌川豊国門人で、文化期当時には高い評判を博した実力派絵師。兄が戯作者式亭三馬の門人であり、自身も人情本を中心に版本挿図に多数筆をとっている。つまり小説挿絵が多いのが特徴だ。一部に北斎風を学んだ形跡もみられるなど、浮世絵の一大派閥歌川派にあって自己流を模索した絵師として認知される人物である。

本書では、冒頭の表紙裏に、本書刊行の意図を明瞭に示す挿図と狂歌が収められる。それは、当時深川にあった五百羅漢寺境内の高楼、栄螺堂（さざえどう）から江戸の景色を眺める2名の旅人の姿である（図1）。

一見してお上りさんとわかる旅姿のふたりは、北斎がすでに天保前期に『富嶽三十六景』でもとりあげた江戸屈指のビュースポット、栄螺堂から絶景を眺めながら、百万都市お江戸の繁栄に目を見張っている。画面上部に寄せられた画讃は、「壺焼の栄螺堂よりながむれば、みどころおほき春の景色」とあり、奥州、つまり陸奥の千久羅坊なる人物が、爛満の春景色に包まれ豊かな表情をみせる東都の繁栄風景に、期待を膨らませるようすがとらえ出される。つまり、一義的には本書が、江戸に住まう人々というよりも、政治の中枢、武家の都として栄える江戸へ旅行や遊山にやってきた地方人に向けて企画されたという姿勢を、鮮明にしているのである。

しかもそのことは、この図に続いて登場する序文の中身からもあらためて読み取れる。

「露おかぬかたも有けり夕立の、空より広きむさし野の原、と太田

持資ぬしは詠給ひけん、これは三百有余年のむかし、今はかしこき聖の美代の、恵の露の漏ことなくて、夫からそれへ家居して竈の煙りは深山路の、霧よりも猶繁かり、かゝる繁華も国を隔境遠くてまだ見ぬ人の、道の栞になさばやと、這回書肆が思ひ起して、懐によき小本となし、たゞ九牛が一毛を、かい付るといふになん

弘化丙午の春　　版元　　横山町一丁目
出雲屋万次郎
馬喰町二丁目
森屋次郎兵衛　　」

山吹の里の贈答歌で著名な、あの太田道灌の時代は、すでに遠い昔のこと。権現様、すなわち家康の統治以来繁栄を重ねることとなった江戸の町、人家の連なる広大なその市街を、ランドマークを辿りながら歩くための手軽で実用的なガイドとして、本書が企画された…。二つの書林からの刊行メッセージも、ここに明確に示されている。

さて、次に続くのが江戸の鳥瞰図である（図2）。すでにこの時代には、鍬形蕙斎の著名な『江戸一目図』が刊行済であり、江戸の景観を俯瞰する大々判の版画も普及していた。その影響は非常に大きかったと類推され、あの北斎も刺激を受けて、のちに日本で東海道や木曾街道の鳥瞰図、さらには中国全土の鳥瞰図を刊行している。江戸の浮世絵師や戯作者に大きな影響を及ぼした『江戸一目図』の顰に倣って、本書の挿図を担当する歌川国直も江戸鳥瞰図に挑戦している。これによって、こののち展開する江戸名所観光に一層の期待が膨らむことになるようだ★[1]。

さて、ここからがいよいよ本題である。

図2

本文では、五街道の起点、江戸日本橋をさらりと略述した上で、いよいよそこを起点として、東西南北の四方に展開する構成をとっている。これはあの『江戸名所図会』でも採用された常套的な編集手法である。四方に向けた各々四つの小旅行を以下に展開していく過程で、作者金水によって配慮されたのは、「名所旧跡神社仏閣世に名高き分を漏すことなく」、つまりランドマークを落とさないように図ったとの主張である。そもそも江戸は近世初期にはランドマークに乏しく、たとえ絵画化したとしても、あの都の洛中洛外図屏風にみられるような豊かな情報量を提供できない口惜しさがあった。現に、江戸名所図屏風と呼ばれるような大画面の作例は制作例が極端に少なく、遺品も乏しいことは、それを顕著に示してもいる★2。だが、人口の飛躍的な増加と都市の拡張に後押しされて、江戸の市内には次第に名所と呼ぶことの可能なスポットが増加し、結果的にはそれが幕末期の広重名所絵の成功へとつながっていく。江戸が、たとえ身贔屓ではあっても、都市の案内記に書き込むことのできる名どころを増やした事実は、これも都市江戸の歴史的な推移の所産であるといえるだろう。

しかも、見どころを押さえた上で、さらにそれら個々の名所を具体的に辿ることを旅人たちに容易にさせるために、「道筋をさへ委く記」すことも本書の特徴となっている。では具体的に、その様子をのぞいてみよう。

日本橋から東西南北の四方へと展開する四つのコースが設定されるなかで、そのひとつである南へ向かうルートは「南の方」と表示される。その冒頭は以下のように書き出される。

> 「日本橋より南の方を通り壱丁目といひ、その次二丁め、三丁め、四丁めを過て、中ばしとなる。此所二丁余ありて橋あり。これを京橋といふ。夫より銀座丁、尾張丁などすぎてまた小さき橋あり。これを新ばしといふ。是より芝口にてまつ直にゆけば、芝、田町、高輪、それより品川宿へ出るとしるべし。」

当初都へと上る東海道を辿っていくこのルートでは、本文中では日本橋より京橋、新橋と街道に沿って主要なランドマークをたどり、その間日本橋通りや今の銀座通りなどの目抜き通りを歩んでゆく。さらに著名な地名を経由しつつ、最初の宿場町である通称南駅、品川に至るのである。江戸に住まう地元人はともかくとして、初めて江戸見物をする旅行客にも、小冊でこれ以上のガイドは望めないような懇切丁寧な記述となっているが、文章に描かれたこの軌跡は、たとえば江戸初期、寛永年間に制作された珍しい『江戸名所図屏風』（出光美術館蔵）の画中でもトレースすることが可能である。なお、本文はこのあと、旅程の都合で通過した同方向の名所へも、一旦立ち戻りながら説明を加えており、東海道と並行する海側に「つきじ御門跡」、つまり西本願寺別院があることを忘れてはいない。見物にあたってできるかぎり重要な名所の見落としの遺漏がないよう、努めてい

図3

るようだ。

「つきじ御門跡（図3）
〇前にいへる日本橋の川すじ東の方なる橋を江戸はしといふ。是をわたり南へゆけば本ざいもく丁通り、夫へゆかずにまた少し東の方へゆけば、かやば丁といひて薬師堂あり。夫より南は北八丁ぼり、夫よりまた南へ出れば築地なり。この御堂より又南の方にあたりて浜御殿あり。此所すべて海辺にて春秋ともながめよし。」

さて本文では、一旦行程を新橋まで後戻りした上で、再度詳しく道筋を紹介していく。

「〇さて前にいへる芝口新橋わたりて行は、芝口三丁あり。次に源介丁、ろう月丁、しばゐ丁、うだ川丁、しんめい丁、はま松丁四丁ありて、こゝに橋あり。これを金杉橋といふ。右しんめい丁の右のかたに、神明の御社あり。境内矢場等ありてつねに賑わしく、ことさら毎年九月十一日より二十一日迄、祭礼せうが市にはきせんくんじゆして、家々にあま酒をつくりふるまふを例となす。」

町名の紹介を経て金杉橋を渡るという道筋だが、途中で芝神明社を紹介するのを忘れてはいない。これに続いて、今度はその先へとぐんぐん南下して行く。

「〇夫より右にいふはま松丁にいたり、右の方に大門あり。これ芝増上寺なり。是は恐多くも　上様の御ぼだい所にして、きれいさうくわん善美をつくし、御山門の広大なる御霊屋三ヶ所あり。三十六のしゆくばうそのほか、さま〳〵の堂社多く、こゝにのべつくすべからず。中にも　安国殿は毎年四月十七日にきせんのさんけいをゆるされ、諸

人敬白す。
〇この寺のつりかねは江戸第一ばんなり。かねのあつさ扇だけありされば、一二人してつきては、なか〳〵まことのねをはつすることなし。これをつきてまことのねをいだすときは、芝うらの魚おどろきにげて猟なしといひつたふ。京都知恩院の鐘とこの鐘と、日本に二ツなりとぞ。」

浜松町からは大門より増上寺をやや詳しくとりあげる。将軍の菩提所のひとつをことさらに自慢する江戸っ子の鼻は高々である。そしてそこからすぐ近くの愛宕社にも立ち寄る。

「〇増上寺より西のかたにあたりて、高き山あり。これを芝愛宕といふ。石階百二十だん余といへり。この山より見おろせば、芝浦のけしき、ゆきかふ船の帆じゆん風にはしるさま、いはんかたなし。この下通り増上寺までを、すべてあたご下といふ。からすもりいなり、日比谷いなりも、みなこのしたにあり。
〇この下通りを北へさしてゆけば、虎の御門より東のかた、あたらし橋といふへ出る。これよりうちは、御内ぐるわなり。西の方の所とあはせ見給ふべし。」

さらにまた、増上寺から赤羽方面へとルートを抜けてくるのだが、札の辻にてようやく東海道と合流。ここで前に辿った品川へと向かうことになる。以下に本文に先だって行程を略述すると、高輪辺、泉岳寺や東海寺を辿りつつ、東海道を南下。品川宿を通過し、鈴が森刑場や大森を通過した所で、一旦右方向に外れて池上本門寺を紹介。ここでまた大森まで一旦歩を戻したら、再度東海道を南下して六郷の渡し、川崎宿と同所の川崎大師も見逃さない。なお六郷川を渡って左方へ進路をとれば、風光明媚な羽田弁天があると説く。なお、この「南の方」全体の末尾には、品川で見送った牛頭天王社の珍しい祭礼を紹介して、江戸の南方の名所を辿る観光旅行は幕引きとなる。

「〇増上寺のうらてを、切通しといふ。夫より赤羽根といふ所へ出てむかふに、有馬様の御やしきあり。毎月五日さんけいをゆるされ、諸人おひたゝしくくんしゆをなせり。
〇夫より芝札の辻へ出て、海辺をゆけば高輪といふ。こゝに牛小屋ありて、諸方へ車をひき出すなり。
〇この所に泉岳寺といふ禅寺あり。こゝにむかし赤穂の義士四十六人を葬りたる墓あり。常にさんけいをゆるす。それより先に東海寺といふあり。沢庵和尚の古せきなり。それよりゆけば、右を八つ山といひ、左りは海なり。東海道品川宿へ出る。南がははたごやあまたあり

て、にきはへり。それより鈴の森を越て、大もりへ出る。この所右の方へ入りて池上本門寺、日れん上人の旧跡にて、諸人さんけいす。古川薬師新田のやしろ、この道すじいりくみたれば、その所々にて問ひてゆくべし。

また大森をまつすぐに凡そ二里ばかりゆきて、六郷のわたしあり。これをわたりて、右は川さき宿、左りは大師がはら、厄除大師堂あり。左りの方海へつき出して、羽田弁ざい天のやしろあり。このへん海べたにて、塩ばまあり。春のころは諸人こゝへきたりて、けしきをながむ。げに、みちのくしほがまのうらも、かくやあらん。また三月のころ、この沖へしほひがりに出る人多し。

品川宿に牛頭天王のやしろあり。毎年六月七日より十九日迄、祭礼神輿出る。このとき海中へ舁入ること、凡一り余。水まん〳〵たる所をゆくに、たとへ子どもといふとも一人もけがあることなし。その神徳のいちしるきこと、申もなか〳〵おろかなり。」

以上が「南の方」と題された日本橋から川崎までの旅程である。ルートの選択やランドマークの取捨には、いうまでもなく編者である金水の意向が影響しているとみられるが、それよりもむしろ重要なのは、これらとりあげられた名所こそが、幕末の江戸ガイド本として江戸自慢の江戸人たちの最大公約数によって共有されたスポットである、ということだ。寛永の遥か昔、あの珍しい『江戸名所図屏風』が描かれたころ、江戸の町は絶対的にランドマークに乏しい発展途上の町であった。だからこそ、その後人口密集都市として発展を続けた江戸人たちは、都に対する江戸自慢のため、江戸の街中に相応の量の名所をつくり置く必要があったのだ。江戸の後期になって、ようやくそれが一応の定着、安定をみたことで、たとえば浮世絵では名所絵に江戸の風景版画が量産され、またこうした手軽な江戸ガイド本にも、それが如実に反映していくことになるのである。

一般的な名所記類で、いまあげた冒頭部分のうち、たとえば西本願寺別院にはどのような記述方法や記述量が割かれているのか、ここで振り返っておこう。名所図会類では信頼が高く引用も多い『江戸名所図会』では、名所を項目別に列挙するオーソドックスな記述法がとられるが、前述した西本願寺別院については巻中に以下のように記される★3。

「西本願寺　同所川を隔てゝ北の方にあり。俗に築地の門跡とよべり。（中略）一向派にして京都西六条よりの輪番所なり。（中略）塔頭五十七宇あり。始め横山町二丁目の南側裏通りにありしを、明暦大火の後この地に移さる。准如上人を当寺の開祖とす。（中略）本尊阿弥陀如来は、聖徳太子の彫像にして、泉州堺の信証寺よりうつす。毎年七月七日立花会、十一月廿八日開山忌にて、七昼夜の法会修行あり、これを報恩講と云ふ。又俗間御講と称す。（後略）」

この『江戸名所図会』の事例が端的に示す通り、一般によく知られる江戸期の名所図会類では、挿図とともに個別の名所がとりあげられ、その説明が文章にて加えられる。寺院の場合は当然、開山や中興、由緒なども随時書き添えられることになる。つまり、ランドマークに関する個別な情報の提供に終始するわけだ。ただし、「西本願寺」など個々の名所の説明は項目を分けて別個に列挙されるため、まとまって掲載される各名所はおよそ同じエリアにあろうことは想像されるものの、個々の名所の地理的関係は実はあまり明瞭ではない。逆に、『江戸名所独案内』ではそこに工夫を凝らし、個々の名所同士を有機的に繋ぎ、その地点から次の地点への方角やおよその里程を意識させる記述のみが積極的に行われているのである。個々の名所の詳細な由来や歴史は説かれないが、その代わりに誰でもが本書を懐に江戸小旅行を実現できるという点で、まさに実用の書であるという評価は、こうした本書の性格付けに基づいている。「始て江戸を見る人もこの小冊を懐にすれはその方角によりて見物の落なきやうに」した、という編集方針は、その点でもきわめて興味深いものといえよう★4。

本書の刊行後、著者金水が再び撰者となり、今度は国直に代わってあの広重が風景を描いた翌弘化4年刊の『江都近郊名勝一覧』、あるいは両者が担当し嘉永3年以降陸続と刊行された『絵本江戸土産』は、幕末の江戸名所本としては本書よりも遥かに高名である。だが、本書はそれらに先行して発表された、実用性に富む親切なお上りさん向け観光ガイド本として、現代の我々にも江戸の小旅行事情や都市概念を伝える貴重な史料となり得ているのである。

結びに代えて

実用的な都市見物の案内記であった『江戸名所独案内』。類書とは異なり懇切丁寧なルート説明重視の江戸ガイド本であった本書だが、皮肉なことに商業的な成功は収められなかった可能性が高い。なぜならば、多くの書肆が活発に出版文化を担った江戸では、刊本や錦絵版画はまさしく大都市江戸で、しかも江戸に暮らす人たちのために消費されるという性格が、もっとも強かったからに相違ない。したがって、江戸の老若男女には当たり前の内容をこと細かに記述し、それゆえに江戸っ子向けの内容ではない本書の販売が苦戦したことは大いに想像される。だからこそ、作者の金水はのちに、パートナーを国直から名所絵の大御所広重に選びなおして、最終的には名所絵の版本として名高いあの『絵本江戸土産』を出版したのかも知れない。だがそれは、旧来の『江戸名所図会』同様の編集方針に逆戻りしたことをも意味するのである。芸術性も極めて高く、江戸をよく知る江戸っ子好みの名所図会である『絵本江戸土産』からみると、まさにプロトタイプともいえる本書『江戸名所独案内』は、かえってその特異な実用書的な編集方針ゆえに、時代を隔てた現代の我々には江戸のありのままを探るための具体的な手掛かりを提供する。平安京以来の歴史を下敷きにし

た、ランドマークに富む京の都の向こうを張って、幕末にはそれ相応に増えていった江戸市中の名所をつぎつぎと結びつけながら紹介する、という手法によって、本書は都市江戸で徐々に育成され、あるいは確立していった新興武都の矜持をも垣間見せてくれる。

本書と内容構成の通う類書が少ないため、幕末刊行の本書を手に、変貌を遂げた21世紀の東京の街を辿ってみようかという気持ちさえ起こさせる…、『江戸名所独案内』はそうしたまことに興味深い内容に彩られていることを、最後にもう一度再説しておきたい。

史料翻刻

（句点は筆者、ルビ省略）

『江戸名所独案内』

弘化三年（1846春）序　松亭金水　歌川国直

（扉）（文中に紹介済）

（一オ・序文）（文中に紹介済）

（一ウ〜四オ・挿図）（省略）

（四ウ）

江都日本橋之図

右に図する処は大江都の惣図にして、その端々たも漏すことなしといへとも、紙中狭ければその道路遠近を見すること能はす。故に次に東西南北の方角により名所旧跡神社仏閣世に名高き分を、漏すことなく道筋をさへ委く記して、始て江戸を見る人もこの小冊を懐にすれは、その方角によりて見物の落なきやうには做したれど、固より広大限りなきを僅の小冊につゞめたれば、実に大海の一滴とやらん、見る人ゆるし給へかしといふ。

（五オ）

江戸日本ばしを中央として、諸方への道すじをくわしくしるす。道すじわかれて混雑するは、また元へかへりて出直すやうにしるしたれば、そのこゝろえにて見給ふべし。

（五オ〜九オ・上段）

東の方

日本ばしより東の方なり、但東北の方もよりによりてこの部に入る。

日本はしより東の方を四日市といふ。このところを通り過れば日本ばしにならびて架るを江戸橋といふ。この橋よりも南は本ざいもく丁通

り、北は伊勢町川岸といふ。さてこれより東の方、川すぢをそひたる町を小あみ丁といひ、こゝにある舟わたしを鎧のわたしといふ。夫より北新ぼりといふ所をすぎれば大なる橋あり。これを永代はしといひて深川との境にわたす。名にしおふ隅田川の下流にして海への落くちなれば。川はゞ広くして橋の長さ百二十間なりといふ。江戸第一の長橋なり。これをわたり右へゆきまた左へゆけば、大きなるとりゐあり。これ深川富が岡八まんの一の鳥居なり。

深川八幡

両かは町家にて賑はへり。夫より三四丁ゆきて、左りに富が岡八まん宮のやしろあり。夫よりさきへゆきて、三十三げん堂すさき弁天など名所あり。三十三間堂は京都のうつしにて、武家方通し矢あり。洲さきは海ばたにして風けいいたつてよく、夏のすゞみ秋の月春の潮干冬の雪と、四時ともにながめたへず。

夫より木ばへ至る。こゝは江戸材木やのあつまりゐる所にして、家々に大きなる内ぼりをかまへ、材もくおびたゝしくつみおく也。此へん広くしてしるすにいとまあらず。夫より砂むら新田塩はまなど、これを略す

夫より道をとひて、五百らかんへ出べし。こゝを本所五ツめといふ。さゞゐ堂とて下よりくる〳〵めぐりて登る堂あり。こゝに五百たいのらかんを安置す。それを出てゆけば長き小川あり、これを本所たて川といふ。夫をわたり道を問て亀戸へ出べし。こゝには亀戸天まん宮とて宰府のうつしなり。そのうしろの方にあづま権現の森あり。

また亀戸の北にあたりて、梅やしきといふあり。一トかまへみな梅の木にて、その数幾千本といふをしらず。花のころは雲のうちにわけ入るが如く、清香ふん〳〵として仙境のこゝちせらる。こゝに臥竜梅とて名木あり。春花のころは諸人くんじゆして、賑はひおびたゝし。

それより向ふ嶋へ出る道、田はたのあぜその外ほそ道等にてしれかたければ、人にとひて出れば、すみだ川のつゝみにいたる。まづ三めぐりいなりよりはじめて、川すじをさかのぼれば、牛のごぜんのやしろあり。これは本所の惣鎮守にて、祭礼毎年九月十五日なり。これより少しおくの方に、興福寺といふぜん寺あり。堂のつくりかた余の寺とはちがひ異風なり、ゆきて見るべし。

それよりまた土手へ出てゆけば、長命寺といふあり。この所にさくらもちのめいぶつあり、その葉のにほひ他にすぐれたり。

三囲稲荷

それより少しさがりて、秋葉ごんげんのやしろあり。境内の庭いたつ

てけしきよく、春秋ともに諸人にぎはひ、或ひは猿廻し、太神楽などきたり、たわふれあそぶ人多し。
この境内に、ちかきころより牡丹を植てぼたんやしきと呼ぶ。さかりの頃は見事なり。此へん寺嶋うけ地など植木や多く、近年菊の花をつくり秋のすゑより冬の始めにいたり諸人に見物せしむ。そめ井すがもにもおとらず見事なり。
夫より白髭のやしろ、神さひたる古やしろにてこれ隅田川の古せきなり、これより少しおくの方に新梅やしきといふあり。こゝは近きころ亀戸なる梅やしきをうつして多く梅をうゑ、また秋にいたれば桔梗かるかやおみなへし荻萩紫苑など、その外いろ〳〵の秋草を植て、これを見る人市のごとく、名づけて花やしきといふ。
夫より猶またさかのほれは、行あたりに寺あり。これを木母寺といふ。この寺に梅わか塚あり、毎年三月十五日念仏くやうとて諸人くんしゆをなす。
〇かくて三囲よりこゝまで、隅田川つゝみ両かはにおひたゝしきさくらありて、二月下旬または三月上旬の頃よりらんまんと咲みだれ、左りにはすみだ川のながれを帯て、その気色いはんかたなし。

是よりさき、綾瀬川丹頂が池なんといふ名所あれども、向ふしまの遊らんは大かたこれまでなり。これより帰らんとするには、流れにつきてたん〳〵川下へさがれば、大きなる橋の所へ出る。これを東橋といひて、浅くさくわんぜおんより少し東の方也。
このはしをわたれば、浅くさかみなり門前へ出る。その道すじは北の方の部にくわしくしるす。

（五オ～九オ・下段）
西の方
日本ばしより西の方なり、但西北西南もこの部に入る。

日本ばしより西の方西川岸といふ所をゆけば、呉服ばし御門へ出る。こゝを入て右へゆけばすべて御丸の内にて、細川様御やしきの前へ出る。その脇に御評定所ありてその所を辰の口といふ。向ふに和田倉御門といふあり、これを入て右へゆき又左りへゆけば西御丸下なり。右の方に御門あり、これを外桜田といふ。夫を出てまつすぐにゆけば、右かはに安芸様黒田様の御やしきあり。その間の坂をかすみがせきといふ。この坂を上り左りへゆきまた右へゆけば、こゝに山王権現の宮居あり。東都第一の大社にして祭礼隔年六月十五日なり。それより右へいたれば赤坂御門へ出るなり。
〇又かすみがせきへ登らずまつすぐにゆけば、とらの御門なり。こゝを出てむかふに京極様の御やしきあり。こゝに金比羅大権現をまつ

る。毎月十日御えん日にてさんけいをゆるされ、江戸は申すに及ばずざい〳〵しよ〳〵さんけいおびたゝし。

山王権現
〇祭礼はかうじ丁十三丁もちろん江戸中氏子より出し数四十五はん、その外をどりねり物引もの等おひたゝしく、江都第一の祭礼なり。
〇この御堀つゞき西の方にあたりて大きなる沼あり。これを溜池といふ。蓮多くありて六月花ざかりの頃は清香ふん〳〵として、あたかも極楽浄土へいたりしも、かくやらんとおもはる。見物の諸人くんじゆおびたゝし。

はちす葉のにごりにしまぬこゝろもて何かは露を玉とあざむく　遍照

〇また外さくら田御門を出て、右のかた御堀に付てのぼれば半蔵御門外へ出るなり。この御門の通り両かは町家にて、これをかうじ町といふ。すべてまつすぐに十三丁あれど、十一丁めは四谷御門なり。かうじ町五丁め左りの方に平川天まんぐうのやしろあり。
〇夫より四ツ谷御門を出れば、かうじ町十二丁め四ツ谷てん満丁などあり。夫をゆきすぐれば四ツ谷大木戸とて、甲州道中新宿の入口なり。この宿を通り越してゆけば、淀はしといふ小橋あり。こゝに水車をかけてなりはひとする家あり。淀橋の水車とて名高し。
〇それをゆきすぎて鍋やよこ丁といふより左りへまがり、半道ばかりゆきて堀の内妙法寺厄除の祖師堂あり。常に参けいひきもきらず、別して毎月十三日はくんじゅをなす。
〇右にいふ半蔵御門より西北のかたは、すべてばん丁といひて武家御やしき多し。この御堀つゞきにある御門を田安見付といひ、至つて高き所にて小川丁へんを一目に見おろす。その坂を九だん坂といひ、その脇の御堀を牛が淵といふ。この所より西の方へむかひてやしき町の小道を出れば、これを市谷御門といふ。それを出て右の方に市谷八まんの社あり。向ひて左りの方に茶の木のいなりの社あり。坂中一めん茶の木をうゑたり。目をわづらふ人茶をたちて願をかくれば、がんびよう平癒することきめうなり。

そも〳〵この八まん宮は、むかし太田道灌のくわんしやうにて、いとふるき宮居なれば、常にさんけいあり。毎年八月十五日は祭礼にて、いと賑はへり。
〇さてこの前の御堀通りを東北へむかひてゆけば、牛込御門なり。此御門の通りにある坂を神楽坂といふ。坂の中頃より右へ入りてつくど明神、同じく八まんの社あり。是よりまた元へかへり、かぐら坂の通りをすぐにゆき、通り寺丁といふより右へほそき小路を入れば、赤城

明神の社なり。境内ひろく矢場のなどありてにぎはへり。且この所高見なれば、小石川辺、また水道丁関口小日向など一目に見ゆる。向ふに高きは目白不動なり。
〇また元へ帰り通り、寺町をだん〳〵上りゆけば、榎下七けん寺町などいふを過て、穴八まんの社へいづる。この所の惣名を高田といふ。それより左りの方に広き馬場あり。これを高田の馬場といひ、大まと弓のけいこ又馬のけいこあり。夫より右へとりてゆけば雑司谷へ出る。こゝに鬼子母神のやしろあり、産後ちゝなきものいのりて、きたいのれいげんありむ。法華の守護神なれば毎年十月八日より会しきにて、この寺々へしゆ〳〵のかさりもの出来、くんじゆすることおびたゝし。中にも別当大げふいんのかざりもの大きにして、人を斗り見せしむ。
〇また元の牛込御門外より東北の方に小石川御門といふあり。この外通りは水戸様御やしき、そのうしろのかたに牛天神のやしろ、その下通りをながるゝ小川あり。これ神田上水にて、井の頭といふ所の池よりこの所へひき、これより筧をもつて日本はしより北東の町々、みなこの水を用ゆ。まことに広大なること、たとふるにものなしといへり。
それより北に伝通院といふあり。この寺の前通りを西へさしてゆけば大つかにて、それより左りへ下れば音羽の護国寺へ出る。坂東の札所なり。右いづれも名所にて、見物せではかなはぬ所なり。この護国寺をぬけてうら通りより、雑司谷への道あり。

（九ウ〜十三ウ・上段）

南の方

（本文中に紹介）

（九ウ〜十三ウ・下段）

北の方

日本はしより北なり、但し北東の方もこの部に入る。

日本はしより北の方の通りを室町といひ、三丁あり。夫より十けん店、その横通り本町すぢなり。十けん店、毎年二月二十四五日よりひな市あり。四月二十四五日よりのぼりを商ふ。両かはの家はもちろん、往来へ中みせ出来てその賑はひいはん方なし。江戸第一のひなのぼりみせなり。また京橋むかふ尾張丁にもあれと、これはすくなし。

〇此所より北の方にある小橋を、今川はしといふ。これをわたりて、のりもの丁かぢ丁なべ丁しんこく丁すだ丁二丁を通りて、広ばへ出

る。こゝにある御門を筋かひばしと云、左りの方にかぶき門あるはしを昌平はしといふ。さてこゝを出て左りへゆけば、右の方聖堂なり。夫より桜のばゝといふあり。此へんを御茶の水といふ。夫より左りの方神田川に筧をわたす。是神田上水にて、そのさきの橋を水道橋といふ。さて筋かひはしを出、右につきて北の方へゆけば、長き通りあり。これをお成かいだうといふ。右の方に神田明神つま恋いなりゆしま天神等あり。いづれも参詣けいの所也。わきて神田明神は祭礼隔年九月十五日、出し三十六ばんそのほか附祭にぎはふ江都大祭なり。夫を過て少し右へゆき、また左りへゆけば、東えい山上野也。これは恐れ多くも　上様の御ぼだい所にて、　御霊屋二ケ所あり。境内のひろさ斗りがたく、三十六の宿ばうそのほか中堂をはじめ諸堂いらかをならべ、壮くわん言語に及びがたし。但し御山内にひがんさくら多く、毎年二月の末より花ひらく。さかりの頃はきせんむらかり集まりて、おびたゝしなんどいふ斗りなし。この御山より左の方に大きなる蓮池あり、しのばずの池といふ。池の中弁財天をまつる。花のころくんしゆなすこと、溜池にまされり。

〇是より御山の外囲ひにつきて池のふちをゆけば、坂を上りて谷中へ出る。こゝに天王寺といふ寺あり。境内桜多し。夫より左の方へ出れば根津ごんげんの社、こゝより西の方へゆけば駒込といふ所へ出る。こゝに追わけありて、夫へまがれば白山権現のやしろ、夫よりさきにけいせいがくぼ巣鴨などいふ処ありて、年々秋にいたればこの所の植木やにて、菊の造りものいろ〳〵出来、見物の諸人引もきらず。夫より猶さきへゆけば、中山道板ばし宿なり。

〇又駒込より追わけへ入らす北の方へゆけば、右に吉祥寺また富士せんげんの宮あり。毎年六月朔日さんけいおびたゝしく。むぎわらの蛇をあきなふ。これをもとめて火ぶせのまじなひとなすなり。

夫よりまた北へむきてゆけば飛鳥山とて、こゝも桜の名所なり。夫より王子ごんげん同いなりの社なり。春は殊さらにさんけいくんじゆす。

〇さて十軒店の横通りを、本丁通りといふ。是より東の方にむきてゆけば、本町三丁め四丁め大でんま丁三丁あり。通り油丁通りしほ丁よこ山丁三丁ありて、行あたりは浅草御門なり。夫を右の方広き所へ出むかふに、長き橋あり。これを両国はしといふ。橋の左右見せものあまたありて、にぎはひ大かたならす。

毎年五月二十八日より川びらきとて、川の左右水茶やその外夜みせを出し、川中にて大花火あり。見物おびたゝし

〇橋をわたりて向ふは回向院、右の方へゆけば一ツ目のはし、夫より御舟ぐら前、そのさきに新大はし。夫より永代橋へいたるなり

〇さて右にいふ浅草御門を出てまつすぐにゆけば、右がわ浅くさ御米蔵ありて、この所をすべて御蔵まへといふ。はたご丁といへる所に石

清水八まん宮あり。夫より黒ふね丁すは丁をすぎて浅草かみなり門、これは観世音の惣門なり。この内に山門あり。本堂正観世音なり。境内ひろく、奥山に見せもの等ありて常ににぎはふ。
〇さて雷神門より左りに、田原町といふあり。此所をゆけば東本願寺へ出る。そのさま築地御門跡におなし。
〇また雷神門より右の方に橋あり。これを東橋といふ。そのはしのてまへより左りにまがれば花川戸といひ、その次を山の宿といひ、その次を聖天町といふ。このうら手の方、猿若町三丁あり。
これよりてまへ、すは丁大川のはたにくわんおん堂あり。これをこまかた堂といふ。ゆゑにこの所をこまかた町といふ。
〇猿若町より北東の町を、田町といふ。夫より土手へあがる。この土手を日本づゝみといふ。その堤の下に新吉原町あり。

晴の夜も　よしはらはかり　月夜かな

（十三ウ・奥付）
作者松亭金水
画工歌川国直

図４　『江戸名所独案内』が提示する江戸旅行プラン

註

☆1 ── 江戸の鳥瞰図に関しては最近次のような新知見が出ており注目される。井田太郎「鍬形蕙斎『江戸一目図屏風』の基底」『国文学研究』第153-154集合併号、早稲田大学国文学会、2008年3月、26-36頁。なお、『江戸名所独案内』の書名が、当時ベストセラーとなった買い物案内書『江戸買物独案内』に擬したものであることは言うまでもない。

☆2 ── 拙稿「江戸と江戸図 ── 『江戸名所図屏風』を仲立ちにして」『美術フォーラム21』vol.18、醍醐書房、2008年11月、27-30頁。

☆3 ── また、往来物と呼ばれる手習本では『江戸往来』、『江戸方角』などの書名で類書が非常に多いが、たとえば文政5年に西村永寿堂から刊行された一本には、巻頭近くに「江戸日本橋より所々へ道法細記」として各場所への距離が列挙され、「西本願寺へ　十七丁」とあり、本文中には手習本につき縷々列挙される同方向の地名のなかに「築地御門跡」と記されるのみである。これらを比較するならば、同じ西本願寺別院の取り上げ方が如何に異なるのかが理解されるはずだ。

☆4 ── 金水が提案する江戸市中の観光旅行プランの全容については、図4を参照されたい。やや注意をひくのは、主要な街道筋を辿る経路としては東海道が圧倒的に長く、次に甲州街道方面へのルート伸張がみられることで、逆に中山道・奥州・日光街道方面へは積極的に展開していない。金水のアイデアは、おそらく各ランドマークの数量や分布状況をもとに工夫されたとみられるが、江戸観光のひとつのあり方として興味深い。

（ないとう　まさと・副所長、慶應義塾大学文学部准教授／
美術史・江戸時代絵画史）